横田基地問題を考える会

ニュース No. 71

連絡先
電話＆FAX 0428-22-6273
ホームページ　アドレス
Yokota-peace. sunnyday. jp

日本のどこにも オスプレイいらない 2024 年撤去の年に

CV22 オスプレイ 全世界で飛行停止！

CV22オスプレイ屋久島沖墜落

横田配備 CV22 オスプレイ

昨年11月26日、福生南公園でオスプレイいらない東京大集会が開催された3日後、横田基地を飛び立った横田配備のCV22オスプレイが、屋久島沖に墜落し、乗員8名全員が死亡しました。目撃者によると左のエンジンから火を噴き爆発。プロペラが折れて海上に落下したとのことです。この機体が横田基地周辺住宅地に墜落していたら大惨事になっていたところです。

昨年、CV22はクラッチの不具合から横田の6機を含め全52機を飛行停止にさせたばかりでした。その後不具合の原因を究明することなく飛行を再開しましたが、奄美空港や大分空港などで緊急着陸を繰り返してきました。また、2022 年以降今回を含め、ノルウェー、カリフォルニア、オーストラリアで4機が墜落し、19名が死亡しています。もはやオスプレイの構造的な欠陥は明らかで、飛行停止ではなく全機種撤去しかありません。墜落当初日本政府が明確な飛行停止を求めない中、米軍はオスプレイの運用を続けてきましたが、一週間後の12月6日突如米軍は「機材の不具合」を理由に全世界のオスプレイを飛行停止にしました。米軍自ら欠陥の可能性を認めたことになります。

2023 年オスプレイいらない
東京大集会

現在陸上自衛隊木更津駐屯地に配備されている14機のVオスプレイも飛行を停止していますが、オスプレイの安全性に関する従来の防衛省の説明も破綻したことになります。

今回の墜落事故を受けて米議会は、国防省に対し、オスプレイの安全性と性能に関する情報を1月4日までに提出するよう要請しました。今回の飛行停止の背景には、オスプレイ事故遺族の強い反発やオスプレイに対する不信感という米国民世論が大きく影響したといわれています。今年こそすべてのオスプレイの即時飛行停止、撤去を求める運動を広げましょう。

（文責　佐々木）

新春ビッグ対談

「横田基地問題を考える会」設立当時から会の活動を支えてこられた代表世話人の盛岡さんと島田さんに、設立当時のことや現在の横田をめぐる状況について対談していただきました。

盛岡　１９９４年の横田基地訴訟の訴訟団解散のレセプションで島田さんから私に横田基地撤去を求める運動がなかったので、そういう運動をする必要があるのではないかという話があった。

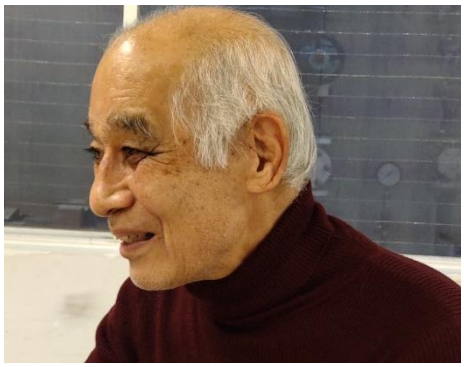
島田　当時の榎本弁護士は中村隆一弁護士の事務所で活動されていた。砂川闘争でもお世話になった弁護士。横田訴訟団の勝利報告会で初めて盛岡先生にお会いした。横田騒音訴訟を榎本弁護士と一緒にやっておられたのが盛岡先生。横田基地は騒音や墜落の危険で住民に迷惑をかけている存在だが、そもそも横田基地は戦争のための基地で、被害だけでなく基地そのものをなくす運動を地元で盛り上げていかなければいけないと思っていたので、そのような話を盛岡先生とした記憶がある。

盛岡　横田公害訴訟を７２年ごろから２０年ぐらいやってきて、訴訟も一段落し、国から賠償金はとったが、飛行差し止めは失敗した。住民が十分組織できず訴訟が終わったので、２０年間何をしていたのかと落胆していた時に島田さんから声がかかり、そのころ美堀町に住んでいたので、横田基地の撤去を求める住民組織を作っていこうということになった。そのころ岩田さんや島田さん、榎本弁護士に糸永さん、新宿平和委員会の井出さんも加わり会が発足した。　横田を監視して告発する運動はあり時々大きな集会があったが、地元住民とは無関係だった。地元住民が横田に反対する組織を初めて立ち上げた。当時我々とは無関係に西多摩の会を宿田さんたちが始めて、期せずして東西に同じような「撤去を求める会」と「考える会」２つできた。

島田　横田の西から北の地域の人たちが座り込みを始めた。南の住民が主に「考える会」を組織し、つながりができていった。

盛岡　「西多摩の会」を組織していったのが共産党の福生地区委員会だった。

島田　福本さんの訴訟団の様棠さん、国労の浅野さんが訴訟団の団長で様棠さんと一緒に活動をしていた。榎本弁護士は「軍隊と住民」という本を出版されて、基地問題と住民の権利について書かれた。砂川闘争の最後の闘いで内藤弁護士とともに付き合いがあった。横田訴訟団の裁判もやっておられると聞いていた。盛岡先生と懇意にしておられる榎本弁護士と一緒に横田基地を撤去させる住民の運動を始めなければいけないという話を３人でした。



盛岡　当時から横田大集会はあったが地域住民の運動は初めてだった。住民の運動が足りないとみんなが思っていた時に榎本さん、岩田さん、私と島田さんで住民運動をどのようにやっていこうかと共産党関係や訴訟団の弁護士が集まって話し合った。

島田　私が深くかかわった砂川闘争は、１９５７年に青木市五郎さんの基地の中の土地返還請求裁判。国は土地を返還したら滑走路が短くなるので、強制的に基地の中の測量をしたことに対して青木さんを支援する労働者学生が

測量阻止のため５７年７月８日に測量がやられたときに柵を押し倒して基地の中に入り警官に止められた経緯があった。当時の全学連は極左的という評価があったが私は６１年から三多摩労協の専従として活動してきたが、当時は革新勢力は統一して共同して運動することが大切だという主張をしてきた。三多摩労協は総評の流れで社会党を支持、共産党とは一線を画す方針だった。その中で、社共両方を支持しろという私の主張は受け入れられなかった。全学連の新左翼と言われた連中も一緒にできるなら共同して行動しよう言っていたので三労でも外されていた

状況だった。共産党の人たちとはあまり一緒に運動はしてこなかったが心情的には社会党、共産党、新左翼も共同で日米安保体制と闘う行動しようと言っていたので、横田基地問題を考える会発足に当たっては、盛岡先生や榎本先生、岩田さんと地域で一緒に運動できるようになってうれしかった。

盛岡　当時岩田さんは幅広い人達とつながりを持ち　発足集会は昭和会館の２階で行った。島田さんが開会のあいさつを行い、一緒に運動を進める組織が必要だという思いで人が集まってきた。日本電子労組を始めとした団体が１００人くらい集まって２階がいっぱいになった。新宿平和委員会の井出さんや清水多恵子さんも入ってくれた。

島田　考える会を結成した直後に西多摩の会ができ、翌年に「横田基地もいらない。沖縄とともに声を上げよう市民交流会」を始めようということで福生市民会館小ホールで集会を行った。横田基地の問題は大きな問題なので市民の集会を統一して福生でやる意味があるということで一生懸命活動したことを覚えている。

盛岡　西多摩と東側の考える会の運動が結び付いたというのが市民交流集会となって今につながっている。

島田　毎月の座り込みも１７７回を数え大きな運動になっている。

盛岡　座り込みは西多摩の共産党や新婦人の人たちが椅子、お茶などを用意し、運営していることが大きい。昭島の新婦人も毎回１０人は参加しようということで取り組み、都の新婦人もそれに賛同して参加している。最初は２，３０人で続けばいいと思っていたが、どんどん増えて今は毎回７，８０人が集まる集会になっているのは西多摩の人たちの功績が大きい。市民交流集会と座り込みは住民の行動としては大きな意義があるのではないか。

島田　市民交流集会の名前で重要なことは、「沖縄とともに声を上げよう」ということと、「横田基地もいらない」ということ。名前の由来は、私達も西多摩も沖縄の基地闘争と連帯して集会をやったり考えたりしてきた。沖縄に行ったり、支援したりすることも大事だが、その前に自分たちが住むところにある横田基地や立川基地に対する闘いを地元で組まなければならないのではないか。沖縄を支援することは沖縄に行くだけでなく、横田でも東京でも基地反対、安保反対の運動が起き、全国で起きることが沖縄と連帯し、沖縄を支援することにつながるのではないか。「横田基地もいらない」というのは、沖縄の基地がいらないのは当然だが、横田基地もいらないんだという運動を起こさないといけないのではないかということを当時宿田さん達と議論した。

第３日曜日の横田座り込み

盛岡　そのとおり。当時東京の民主的な運動というのは、沖縄の支援に行く、沖縄県民を支援する会などがあって沖縄には行くが、横田があるのを忘れていないか。地元の基地に反対する運動が必要ではないか。沖縄を本当に支援するには地元に戻って地元の米軍基地に反対する運動が必要なのではないかということが話し合われた。

…対談は７２号に続く

「関東大震災100年　隠蔽された朝鮮人虐殺」企画展示を終えて

高麗博物館　関東大震災研究会

高麗博物館では、昨年7月5日から12月24日まで、「関東大震災100年　隠蔽された朝鮮人虐殺」の企画展示を韓国の「植民地歴史博物館」と連携して開催しました。展示の内容は、パネル展示が「韓国併合と朝鮮人虐殺」で始まるように、日本が朝鮮を侵略し植民地にしたことに抗して独立を求めて立ち上がった朝鮮人に対して日本の警察・軍隊は「日本に逆らう不逞の輩」として殲滅作戦を行い、日本の新聞が書きたてました。何万人という朝鮮人が殺害されました。日本人はいつか朝鮮人に報復されるのではという恐怖感を持ちました。植民地戦争の続きとしての1923年として。当時の虐殺状況を伝えると共に、今日の歴史改ざんの動きとして、教科書への統制、小池都知事の朝鮮人犠牲者追悼式典への追悼文拒否、都知事に忖度した都人権部の検閲、表現の自由の侵害、京都宇治市ウトロ放火事件、在特会のヘイトデモなど、1923年当時と変わらぬ日本政府の隠ぺいと「虐殺はなかった」としたい一部の日本人の思惑が、次のジェノサイドを引き起こしかねないことを訴えました。

なによりも今回の展示の目玉は、100年の眠りから目覚めた淇谷（大原彌市）作「関東大震災絵巻2巻」の展示です。前館長新井氏（福生市在住）が入手したこの絵巻には、震災の状況はもとより、朝鮮人虐殺の状況が鮮明に描かれています。淇谷は「恐るべきは流言飛語は興奮を極めつつある市民の神経をなやまし、武器を提げて自衛するにいたらしめたり。（中略）前代未聞の恐慌」と言い「此の惨禍に遭遇せざりし人々に示し、以て省慮の念をしたいと記しています。

展示期間中、約4500人の方が参観してくれ、多くの方がアンケートに答えてくれました。何点か紹介します。「特に当時の様子を描いた絵が印象的でした。「レイシズム行為のピラミッド」の図も。虐殺事件がある日突然起こるのではなく、それまでの日々の積み重ねの上にあるのだと感じました。」（30代）「歴史的事実だけでなく、それがどう現代の問題につながっていくのかということが分かりやすく工夫された展示でした。」（20代）「過去の虐殺の経緯や当時の日本人の恐れの感情がどうしても過去の物と思えず（現に今も起きつつありますが）、心苦しかったです。心苦しいで済ませず、現在の排外主義に抵抗するためにも、学んでいきたいです。」（20代）

このような若者の思いや決意を真っ向から裏切っているのが安倍以降の自公政府です。昨年、杉尾氏、福島氏、石垣氏ら3議員が、国会で朝鮮人・中国人虐殺について質問しました。しかし、政府答弁は「政府（警察庁）内で調査した限りでは、その事実関係を確認することのできる記録が見当たらない状況で、答えるのは困難である。」に終始し、国際基準である謝罪と賠償から逃げ、恥の上塗りをしています。私たちは、今後も機会あるごとに今回のような展示を行い、政府の責任を追及していきます。パネル展示と関連資料をまとめた図録「関東大震災100年―隠蔽された朝鮮人虐殺」があります。（500円）　ぜひお求めください。

高麗博物館

解放運動無名戦士墓のこと

港区の青山霊園に解放運動無名戦士の墓があることは多くの皆さんがご存じのことと思います。

１月３１日は３月１８日にこの墓に合葬される方の推薦申し込みが締め切られる日です。

解放運動無名戦士墓は「女工哀史」の著者細井和喜蔵の死後、「女工哀史」などの印税相当額が出版社から細井和喜蔵遺志会に寄贈日本国民救援会され、同会は、細井和喜蔵の遺骨を葬り、合わせて社会の進歩と革新の運動に貢献した人々の「共同の安息地」となるようにと、無名戦士墓を建立しました。

終戦直後、日本国民救援会は、細井和喜蔵遺志会から無名戦士墓を譲り受け、戦前の治安維持法の下では刻むことのできなかった「解放運動」の４文字を無名戦士墓の上に書き加え、その後、毎年合葬追悼会を、日本国民救援会をはじめ労働組合や民主団体の献身的な協力に支えられて開催され、今年７７回を迎えます。

合葬追悼会は、世界で初めて人民の権力として生まれたパリコミューン成立の３月１８日を記念して開催されてきました。これまでに５万人を超える方々が合葬され、昨年、多摩では４９人が合葬されました。

合葬の推薦は団体またはお二人で推薦できます。詳細は日本国民救援会三多摩総支部電話０４２-５０５-８１４０にお問い合わせください。（文責河野）

砂川・横田の記憶を語り継ぐ

一都留文科大学進藤ゼミー

砂川フィールドワークで学生と交流

昨年 12 月２日、山梨県都留文科大学進藤ゼミの学生５名と進藤先生が砂川闘争の地を訪れ、横田基地問題を考える会と交流しました。冒頭佐々木事務局長から PFAS 問題について、多摩地域が広範囲に PFAS に汚染されている実態をパネルを使って説明。PFAS 汚染が米軍横田基地由来の泡消火剤である可能性が極めて高いこと。日米地位協定で米軍側が立ち入り調査を拒んでいることや地下水や土壌から PFAS を除去させるための市民活動について話しました。

続いて代表世話人の島田さんから砂川闘争の経緯と農民や支援者の闘い、続く伊達判決と最高裁への跳躍上告による不当判決に至る経過について地図を示しながら解説されました。事前学習として「流血の砂川」を見てきた学生の一人は、「当時の農民や支援者が権力に対してあそこまで抵抗したエネルギーはどこにあったのか」と質問。島田さんは、「当時は戦争直後で、悲惨な戦争を経験した農民は、自分たちの土地が再び戦争に使われることを拒否する気持ちが強かったので土地接収に反対した」と説明。砂川闘争を闘った当事者の島田さんの話は、学生たちの心に響いたのはないでしょうか。

山と収穫

常泉秀昭

山へ行った帰りに記念となる物を持って帰る癖がある。お金を払って求める土産品とは違う。その一、欧州アルプスの盟主と言えば「モンブラン」「アイガー」と並び、「マッターホルン」であることは論を俟たないだろう。その名峰に登ったのではなく、直下のゴルナーグラードへ行った。此処は富士山に対峙する河口湖の位置に当たり、云わばマッターホルンを眼前に見上げる絶好のスポットである。麓の町ツエルマットから、ラック式登山鉄道が三千ｍにある高見の駅へと連れて行ってくれる。此処はアルプスの名峰が周りをぐるりと囲んでいる。その中にあっても主役は我らがマッターホルンで決まりだろう。蒼天にすっくと聳えるマッスは、勇壮の極みだ。ところで、感動から我に帰り足元を見ると、ごつごつした石塊がそこら中に散乱していて歩き難いことこの上ない。が、よくよく眺めると色々な形の石が有って面白そうだ。それも、殆どはマッターホルンと同じ花崗岩でできているらしい。そうとなれば、迷わず三角錐の形状をした石を探すと結構なほど見つかる。２～３個手に取って手頃な個体をポケットにしまう。東京の自宅まで同行して貰った。ゴルナーグラードからの帰路は登山鉄道を途中下車してハイキングを楽しみながら麓のツエルマットに戻るのが良い。途中には小さな池（ゼー）が点在し、雲と風さえなければ「逆さマッターホルン」にお目にかかれる筈だ。

その二、高校から大学時代に奥多摩・奥武蔵の山々を駈けずり回る様にして登った。青梅線の沿線に住んで居た親友の影響が大きかったと思う。そんな私たちは、低山歩きに徹した。「ワンデリング」いわゆる「自由な彷徨」には登山とは違った楽しみが有る。登ることを目的にしないので、何でもありだ。峠道に道祖神を訪ね、三等三角点を探し、春秋を問わず夏は夜間に尾根を歩き、冬は陽だまりを求めて落ち葉を踏みしめる。中で良くやったのが吟行だ。と言って本式の俳句ほど難しくはない、何しろ中七と下五の部分「地球の皺を山と言う」は始めから決まっているのだから。例えばこんな具合だ、「秋の空、地球の皺を山と言う」と高橋君が詠めば、次は私が「渡り鳥、地球の皺を山と言う」と返す按配。良く言う「～根岸の里のわび住まい」の真似で、ふざけた吟行だ。さて、低山歩きの最後には、それなりの収穫が待っていた。栗やアケビに始まり、真っ赤なカラスウリなどが手に入れば歓喜したものだ。

そんな或るときのこと、例によって里に下りて来ると、鈴なりに成った柿が眼に留まった。廃村になった家のものだったのだろう。普段なら見過ごしてしまうが、そのときは他に目ぼしい収穫が無かったので、二人してごっそりと頂戴した。案の定、渋柿だったがそれは最初から承知の上で、持ち帰って「干し柿」にしたのは、言うまでもない。

令和五年十一月